フィールドで考える

呪術から見る民族関係
―東マレーシアの華人と先住民

市川 哲（いちかわ てつ）
本館機関研究員

日常での関係を研究

マレーシアはマレー半島に位置する西マレーシアと、ボルネオ島北西部に位置する東マレーシアというふたつの地域から構成される国家である。わたしは東マレーシア側のサラワク州に居住する華人（中国系移民）を対象としたフィールドワークをおこなっている。調査テーマのひとつは、華人とマレーシアの他の民族、特に先住民との関係についてである。

マレーシアの華人はこの国の総人口の四分の一を占める。マレーシアにおける華人と他の民族との関係にはこれまでも多くの研究者が注目してきた。だがそうした研究は政治経済的な問題をテーマとすることが多く、日常的なレベルでの華人と他の民族との関係は十分に研究されてこなかった。

先住民の呪術のイメージ

マレーシアは典型的な多民族国家である。特に東マレーシアには数多くの少数民族が居住している。サラワク州の華人も当然、このような少数民族とさまざまなかたちで交流することになる。だが都市部に居住する華人のなかには、おもにボルネオ島内陸部に居住する先住民と接触する機会がそれほど多くない者も存在する。そのためか、このような華人のなかには、先住民に対しエキゾチックなイメージをもつ者がいる。そしてそのイメージは、しばしば呪術的な色彩を伴うのである。

これから先住民の住んでいる地域に行く、とわたしが言うと、東マレーシアの華人の友人たちはときどき、冗談半分に以下のようなことを言うのであった。曰く、先住民のなかには呪術を使う人が大勢いる。特に女性には気をつけろ。例えば誰か女性がお前を好きになると、お前に呪術をかけるかもしれない。そうすると、お前は理由もわからずその女性を好きになり、結婚して先住民の村のなかにとどまってしまうだろう…。そしてこのような呪術にまつわる話は、しばしば自分たちの親族や友人の身に起こったこととして語られるのである。

二〇〇七年、わたしはラジャン川下流の町シブから船に乗り、七時間ほど遡ったところにあるブラガという町を訪問した。ラジャン川はサラワク州内で最大の河川であり、上流域にはイバンやカヤン、クニャーといった先住民が多数居住している。これらの先住民は、現在では都市部に出稼ぎに出たり、林業会社の伐採キャンプで働いたりしているが、もともとは川沿いにロングハウスとよばれる高床式の長屋風の家屋を建てて居住し、山の斜面を切り開き焼き畑を作るという生活を送ってきた。

シブに住む華人の友人たちに言わせると、このような上流域の先住民が、下流から訪れる華人にしばしば呪術をかけるというのである。特に食べ物に呪薬を混入させることにより相手の理性を麻痺させ、正常な判断をできなくさせるらしい。そのような状態で先住民女性と恋に落ち、ロングハウスのなかにとどまらざるをえなくなる状況に陥ることを友人たちは恐れているようであった。

例えば以下は二〇〇七年に友人の子どもの友達に起こった話である。一九歳のその華人男性は、林業会社で働くためにブラガを訪れた。あるとき、彼は伐採キャンプの近くのロングハウスに遊びに行き、先住民たちと酒盛りをした。どうやらその酒のなかに呪薬が入っていたらしい。彼はそのロングハウスに住む一六歳の少女と突然恋に落ち、結婚することに決めてしまったそうである。彼の両親はあまりに突然の出来事に動転したが、彼は先住民の少女をロングハウスに置き去りにすると自分は気が狂ってしまうだろう、と述べ、両親の言うことに耳を貸さなかったとのことである。

呪術をかけられるのは男性ばかりとは限らない。例えば、ある華人女性は教師としてブラガにある小学校に赴任したときに呪術をかけられたと信じられている。彼女はその学校で、一人の先住民の男性教師と知り合った。彼女はその男性教員から言いよられたが、それを断った。だがわたしの友人たちによると、彼はその後、ひそかに彼女の食べ物のなかに呪薬を混入させて彼女の気を引こうとしたらしい。シブに一時的に帰っていたある日、彼女は突然正気を失い、体中に黄疸が出たそうである。彼女の家族は急いで病院に連れて行ったが、病因は不明だった。仕方なく、シブに住む先住民の呪術師に頼んでなんとか呪術を解いてもらったとのことである。それ以後、彼女は呪術を恐れ、ブラガに戻らないことにしたらしい。

未知の土地への不安

現実には、上流の町やロングハウスは、呪術に満ち溢れた世界ではない。現在、サラワク州の多くの先住民はキリスト教を信仰しており、むかしから伝わる宗教や儀礼も次第に廃れつつある。多くの若者は教育や仕事のために都市に移り住んでいる。林業企業の従業員のなかには、パプアニューギニアやソロモン諸島といった国外の伐採地に赴任する者まで出てきている。アンテナさえあれば衛星放送も観ることができるし、若者たちはみな携帯電話をもっている。

民族同士の関係は、政治的な対立や経済的な取引、あるいは自分たちが属する民族のアイデンティティといった部分にばかり目がゆきがちである。だがこのような集団としての民族関係だけでなく、華人や他の民族の個人個人が話す内容に注目すると、都市部と農村部、よく知っている土地とよく知らない土地、といったさまざまな要因がお互いの民族イメージをかたち作っていることがうかがえる。

東マレーシアの華人から聞いた先住民とその呪術に関する話には、日常的に頻繁に接触するわけではない、よく知らない土地に居住する人びととの民族関係や、お互いがもつイメージを考察するうえでのヒントがあるように思われる。下流に住む華人たちの呪術に関する話は、よく知らない土地に対する不安感が増幅させている部分があるのかもしれない。このような具体的な日常生活の場で見られるエピソードから、民族関係をとらえなおしてゆきたいと考えている。

シブの町並み。華人が多いため、中国語の看板が目立つ

先住民のロングハウス。高床式の長屋に数十家族が暮らす

華人の店で野菜の種を買う先住民女性